「利用者の尊厳」重視

多床室でもプライバシー確保

設計ひとつでここまで変わる

高齢者施設のケア

岐阜県内で特養、有料老人ホーム、グループホーム、デイサービスなどを運営する社会福祉法人新生会（岐阜県池田町）。「尊厳と自立」をテーマに「その施設でどんな介護をするのか」、各施設のコンセプトを徹底的に追求し、建物・環境に反映させるのが同法人の特徴。建設時には役員や現場職員、設計者を交えた「夢会議」を設け、議論を尽くす。石原美智子名誉理事長は「人の暮らしに建物が及ぼす影響は大きい。特に重度要介護者にとって住まいの環境は大きなウエイトを占める。人の尊厳に重点を置いて発想すれば、その建物をどう造るかは自ずと見える」と語る。

石原美智子名誉理事長

一見個室風の多床室が特徴

事例1 リハビリセンター白鳥（岐阜県池田町）

デイサービス、ショートステイ、特養、グループホーム、多世代交流カフェからなる複合施設。自立支援を一番の目的にリハビリに力を入れた運営を行う。

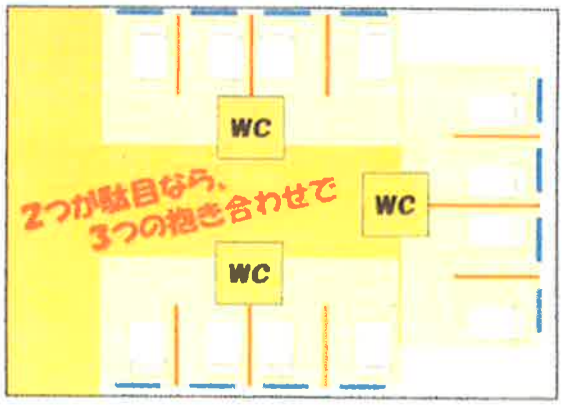
2階の地域密着型特養は、「廊下側のベッドに窓がない」、「ベッド中央のスペースが通路としてしか機能しない」、「利用者のプライバシー確保が十分でない」といった、従来の多床室のデメリットを補う造りとなっている。

全てのベッドを窓側に配置し、多床室でも個室を実現。4部屋を3つ抱き合わせにし、間にトイレや洗面所を入れ、間仕切りをしている。3つの居室群の中央にできたスペースにソファ・テレビなどを置き、共有スペースとして活用。中央の食堂兼機能訓練室を挟んで反対側にも同じ形で12室の居室がある（右下図参照）。

個室は3畳程度で小さめ。「ここでは、どれだけ重度になっても車椅子やウォーターベッドを使って起きる。寝かせきりにはせず、最後まで部屋の外に出て他の入居者と共に過ごす。寝るだけの場所なら、大きな個室はいらない」と桑原陽施設長。結果的に多床室扱いでコストが抑えられ低所得者でも利用できる。

▲一見個室風の多床室

「白鳥」の多床室レイアウト



重度者ほど住環境重視

廊下がないため動線が短く、職員も働きやすい。コンパクトで機能性に富みながら、利用者のプライバシーも保つ、新しい発想の多床室だ。

2つのユニット一体化し効率化

事例2 グループホーム「もやいの家瑞穂」（岐阜県瑞穂市）

2ユニットのグループホームは、ユニットと共有部があり廊下でつながっている、あるいは1階2階に分かれているのが通常だ。

「もやいの家瑞穂」は、その共有部を抜き2ユニットを一体化した、独創的な施設。2ユニットを一体化することで、介護職員が一人でいる時間帯を限りなく少なくし、精神的負担を軽減。施設全体の面積を小さくし、コスト削減もはかる。

玉城栄之功施設長は「ユニットは個別ケアを進めていくための器。2つを一体化した時に、しつらえをどうすれば利用者にとって生活しやすい環境になるのか、あらゆる生活シーンをイメージし、設計者に伝えた」と話す。

利用者は比較的座って過ごす時間が長い。そこで、座っている利用者の目線に多くの人が入らないよう、視界を遮る仕掛けを多くした。天井高を伝統的な日本家屋にならった1・8mにすることで空間に凹凸感をつけ、落ち着けるセミパブリックのような小スペースを所々に造った。

現在、18人が生活しているが、昼間は5～6人の単位で施設内のスペースへ散る。結果、ユニットよりも小さい単位で、より個別性を担保した介護が可能となった。

敷居や壁で遮断することなくプライベートな空間を確保し、座って生活する利用者の視界を遮りながら、立って仕事をする介護職員の視界は良くする。介護のプロとして培ってきた経験をフルに生かし、智恵と工夫で作り上げた空間と言える。

▲「もやいの家」の共有スペース

ソフトの工夫でハードを活かす

新生会の施設を多く手がけてきた大建met（岐阜市）。「もやいの家瑞穂」、「リハビリセンター白鳥」の設計を手がけた平野勝雅さんは「毎回テーマが明確で、設計しやすかった。一番のハードルは、『多床室でも個室』、『2ユニットを1つ』にといったこれまでの発想にない空間を造るうえで、制度との整合性をどうつけるか。そこをクリアすれば、あとはコンセプト通りに進めていくだけ」と話す。

白鳥では、極小の個室空間でも過ごしやすい環境づくりに努めた。もやいの家では、2ユニットを一体化して大きくなった空間に、住宅らしいスケール感をどう作るかを工夫した。

「ここで何かをしなければいけないという造り方はせず、フレキシブルに設計している。使い方によって様々な可能性が出てくるが、新生会さんは、建物を使いこなしていくのが上手い」（平野さん）。

多様性のある建物をどう生かすか。介護の現場では、建物と環境の意味をよく理解し、その中で生きるソフトを作りあげていく。ハードとソフトを上手く組み合わせ、質の高い専門的な介護ができる環境を作り出していく。

全ての年齢層に安心な暮らし提供

事例3 シティタワー・アンキーノ（岐阜市）

平成19年、岐阜駅西にオープンした43階建ての「岐阜シティタワー43」。新生会がプロポーザルした3階の医療福祉ゾーンは、診療所・薬局・歯科・美容室・整体・レストラン・音楽教室・保育・デイサービス・訪問看護・訪問介護・介護付宿泊施設の異業種が連携し、「赤ちゃんから高齢者まで安心して暮らせる街づくり」をスローガンに小さな街を形成する。

新生会の運営する介護付宿泊施設「シティタワー・アンキーノ」は、アセスメントとターミナルケアに特化した介護保険を使わない宿泊施設（8床）。1泊2日から宿泊でき、24時間切れ目のないケアを受けることができる。

「ハード面では診療所・訪問看護ステーションと繋がっており、医療的ニーズの高い利用者にも対応できる。ソフト面では保険を使わないため制約がなく、利用者の望みに柔軟に応えられる」と川瀬由起子管理者。アセスメントやターミナルケア以外にも、少し体調が戻るまで、認知症の妻と記念日を祝いたいなど、様々に利用されている。

石原名誉理事長は「ターミナルを一人で、あるいは老々介護で乗り越えられる人ばかりではない。訪問介護や看護を使っても、24時間ついてはいられない。シティタワー・アンキーノは、いざという時のためのセーフティネット」と話す。

介護保険でできないサービスは保険外で整備していく。新生会のハードとソフトはすべて「人としての尊厳を最後まで守るには何をしなければいけないか」という発想の元に作り上げられている。